

工業科に学ぶ生徒に自信と誇りを

北海道札幌工業高等学校長 佐藤 俊

1. はじめに

戦後の日本は、昭和30年代後半からの高度経済成長とともに、消費が美德となりモノを修理して使うことより、使い捨てることが良いことだという時代が続いた。国民生活が経済的に豊かになるにつれて、進学率も上昇し学歴(学校歴)社会が進み、「教育ママ」という言葉が誕生するなど受験競争が激化した。勉強は誰のためにするのか。「誰のためでもない、自分のためにするものだ。」という教えを結果のみ鵜呑みにして、自分のためだけに勉強する日本人が増え、他人を蹴落としてでも自分だけ良ければ良いという価値観が充満し、年齢を問わず嘆かわしい事件・事故を起こす日本人が増えてきた。「他人のために尽くす」という日本人の美德が忘れられ嘆かわしい現状がある。

今こそ、実学を主とする工業教育においては、実践的なものづくり教育をとおした人間教育に主眼をおくことが大切である。全国工業高等学校長協会(以下「全工協」という)は、その時代の状況を踏まえながら、我が国の工業教育のあるべき姿を求め続け、目指すべき理念と具体的な施策について提案してきた。

現在、全国の工業高校生に熱い挑戦意欲をもたらしている「高校生ものづくりコンテスト」「ジュニアマイスター顕彰」「技術・アイデアコンテスト」などはその成果ともいえる。

しかしながら、全国各地で少子化等による学校統廃合を含む高校の再編計画が進行しており工業高校も厳しい状況にある。各工業高校では工業教育の活性化に向けた取り組みを積極的に行っているところであり、高校進学者のニーズという一側面からのみを根拠として統廃合が行われるならば、将来の日本にとって大きな禍根を残すことになるかと危惧している。

若いうちにものづくりの感性を身につけた多くの工業高校卒業生が日本の工業技術の進展に大きく貢献し、国民生活の向上を実現し今日の豊かな日本を築いてきたといっても過言でない。しかし、高度な技能や技術を持った職人や技術者が社会的に必ずしも優遇されずブルーカラーよりもホワイトカラーが優遇され、国民が経済的に豊かになるとともに我が子はホワイトカラーにとの親の願いから高学歴社会が進行し、高度経済成長とともに高学歴志向・普通科志向が高まり、工業高校の相対的位置が低下してきた。

一方では、知育偏重教育による生活体験の少ない子どもたちが増え、コンピュータ等の普及により仮想社会と現実との区別がつかない子どもたちも増加している。

このようなときにこそ、実学を主とする工業高校が着実な実践をとおしてその存在意義を発信し、高校段階での工業教育の重要性と必要性を社会に認識してもらうことが重要である。

ここでは平成17年5月に発表された全工協の全国工業教育理念検討委員会(以下「理念検」という)の最終まとめの中から教え育てる生徒像に焦点を当てて記述する。

2. 進路状況の変化

昭和年代の工業高校では8割を越える生徒が卒業と同時に就職して産業界で活躍しており、工業高校の教育課程も工業技術者・技能者を育てるという完結型の教育を目指していた。

しかし、平成年代に入り進学者が徐々に増えはじめ、平成3年頃からは進学者が増加傾向を続け、平成15年卒でピークとなり、43.2%が進学、就職は50.2%となった。その後平成16年卒、平成17年卒と就職者の割合が若干は増加してきている。

このような状況から継続型の教育の必要性が論じられるようになり、一部には進学者の増加に対応するため、工業に関する科目の履修を少

なくし進学対応を主とする教育課程を編成する学校・学科も現れはじめた。

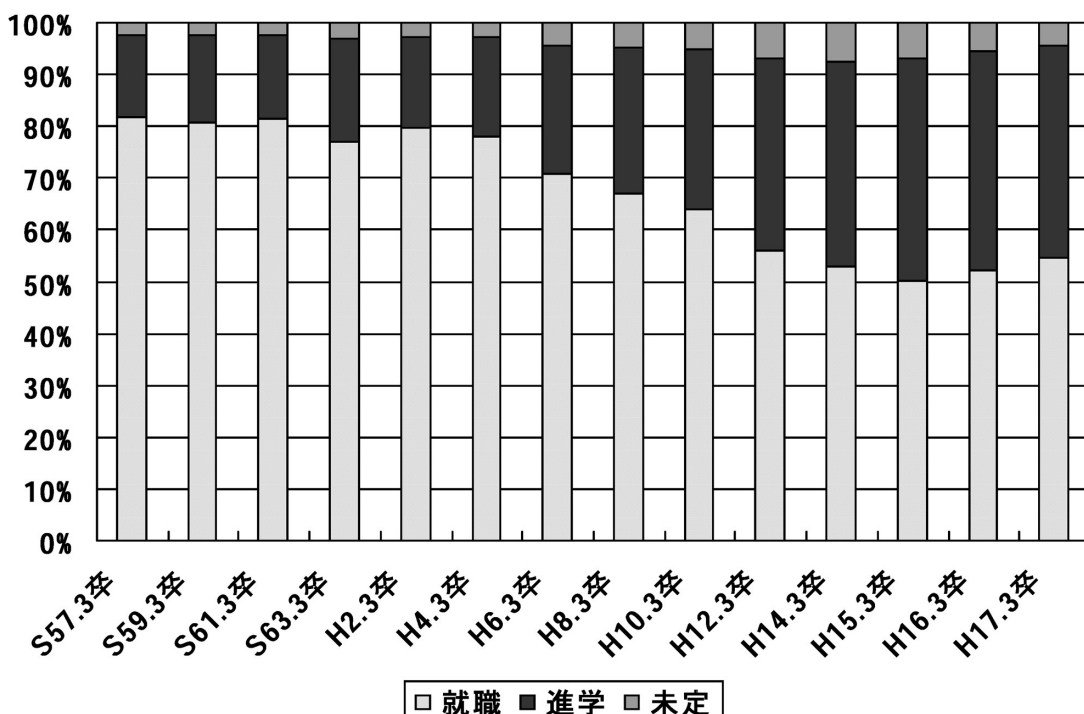
3. 教え育てる生徒像

多くの工業高校では、学校の活性化に向けた特色ある教育活動を展開しつつも、教え育てる生徒像が見えにくくなり、教育課程をどこに焦点を当てて編成すべきかという課題を抱えていた。

理念検では工業高校で教え育てる生徒像を明確にし、共通認識に立って活性化方を推進すべきと考え、工業科に学ぶ生徒の進路面から分析を試みた。

これまでの進路指導は「就職」と「進学」の2分類で対応してきたが、就職する生徒の中にも工業系以外の分野に進む生徒もあり、進学する生徒にも理系・工科系以外に進む生徒もいることから、一概に就職・進学の括りだけでは十分な進路指導が難しくなっている。

進路状況の経年変化



そこで、工業高校に学ぶ生徒の進路実現を積極的に支援するとともに工業高校の教育力を活かす観点から進路タイプを3つに大別して教育活動を展開していくことが肝要と考えた。

教え育てる生徒像を目指す進路別に、実践的技能士を目指す進路Aタイプ、実践的技術者を目指す進路Bタイプ、堅実な職業人を目指す進路Cタイプとし、進路Aタイプと進路Bタイプの生徒を合わせて「将来のスペシャリストを目指す生徒」と定義した。

さらに、卒業時の進路先毎にA1、A2、B1、C1、C2、C3と細分化することにより、個に応じたきめ細かな進路指導をすることができると考えた。

進路Aタイプとは： 実践的技能士を目指す

実践的な技術を磨こうとするタイプで、工業科で学んだことをベースに、工業系の職種に就職したり、工業系の専門学校等に進んだのちに

職場において更に技術を磨き研鑽しようとする生徒

A1：工業系の職種に就職する生徒

A2：工業系の専門学校等に進学する生徒

進路Bタイプとは： 実践的技術者を目指す

実践的な技術者を目指すタイプで、工業科で学んだことをベースに、更に技術的な理論を深めようと工科系大学等に進み実践的エンジニアとして活躍しようとする生徒

B1：工科系大学等に進学する生徒

進路Cタイプとは： 堅実な職業人を目指す

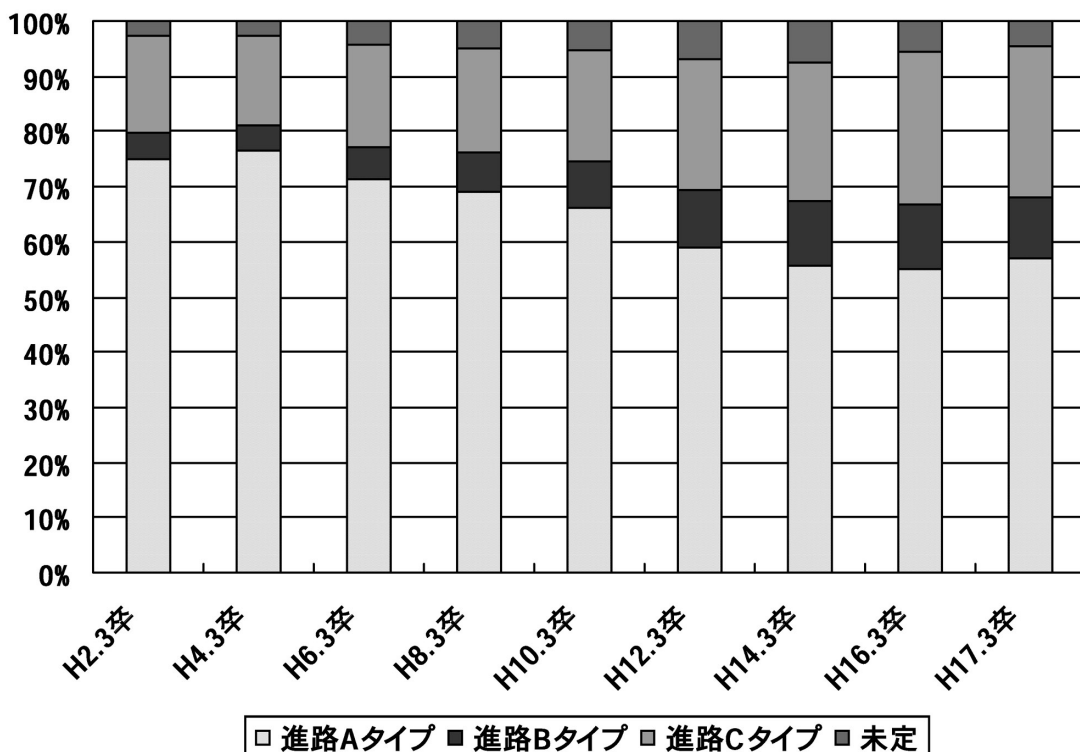
産業全般に職を求めるタイプで、工業科のもののづくり教育をとおして、生きていくための勤労観・職業観を身につけて、産業全般に就職して心豊かな人生を歩もうとする生徒

C1：工業系以外の職種に就職する生徒

C2：工科系以外の大学等に進学する生徒

C3：工業系以外の専門学校に進学する生徒

進路タイプ別の経年変化



各工業高校においては進路タイプの構成割合は異なるが、進路タイプに応じたコース制や選択制を取り入れるなどして、生徒一人一人の進路実現を可能にする教育課程を編成することが大切である。

工業教育においては、本物志向のものづくり教育をとおして技術・技能面はもとより、人としての在り方、生き方を身につけさせたいものである。

4．工業科に学ぶ生徒に自信と誇りを

工業高校は、これまで国の施策として設置され、多くの有為な人材を産業界に輩出し、産業経済の発展および国民生活の向上の実現に貢献してきた。

しかし、最近の各地域の高校再編計画をみると、工業高校の必要性や素晴らしさを理解せず、生徒のニーズという側面に偏った論議が展開されているように感じられる。

これからは、工業高校の存在意義を正しく再確認するとともに、工業高校への理解者や支援者を増やしていく努力が必要である。

多くの方々に工業高校を正しく理解してもらうためにも、工業科に学ぶ生徒の生き活きた活躍の様子や工業高校が教え育てる生徒像を積極的に発信することが緊要の課題である。

教え育てる生徒像いわゆる進路タイプを広く情報発信することにより、次のような効果が期待できる。

- (1) 進路タイプを理解して入学する生徒が増えることにより工業教育の活性化に繋がる。
- (2) 進路タイプに焦点化した特色ある教育課程を編成できる。
- (3) 教え育てる生徒像の観点から工業教育活性化事業について見直しや改善が図れる。
- (4) 3タイプ6系列の進路に応じて適切な進路指導が可能となりキャリア教育が充実する。

- (5) 教え育てる生徒像を明確にすることにより工業高校への理解者、支援者が増える。

全国の工業教育に携わる者が教え育てる生徒像を正しく理解し、共通の認識に立って教育実践することが工業教育への正しい理解に繋がり、延いては工業科に学ぶ生徒に自信と誇りを与えることになると確信する。

5．おわりに

現在、団塊の世代の退職にともなう熟練技能士・技術者の交代期となり、本物志向のものづくり教育は脚光を浴びている。工業教育に携わる者が工業教育の将来に自信と誇りを持って進みたいものである。

工業高校卒業生は、製造業のみならず地域社会の社会資本基盤整備や生産設備、豊かな生活を保障する耐久消費材の製造、保守、管理等といった広い分野で活躍している。

工業教育の使命は、日本のものづくりを支え、発展させる人材の育成であり、工業教育においては、本物志向のものづくり教育をとおして技術・技能面はもとより、人としての在り方、生き方を身につけさせることが大切である。

工業科に学ぶ生徒の幸せを願い、工業教育の活性化、延いては日本の明るい未来のため微力ながら努力して参りたいと考えている。

追記

北海道工業高等学校長会では、工業科に学ぶ生徒の活躍の様子を多くの方に知っていただくため、今年1月にホームページを立ち上げた。ご覧いただき感想などをお寄せいただければ幸いです。

URL:do-kougyou.hokkaido-c.ed.jp